# 灯

## 海賊とよばれた男

草野　義輔

勤労感謝の日を前にベストセラー「海賊とよばれた男」から、労働ということに関して多くの示唆を得た。

この本は石油業界の異端児として、しかし日本人としての誇りを失わず民族資本の会社を興し、戦中戦後の混乱期を見事に乗り越えた傑出した経営者が主人公だ。主人公の経営方針として有名な「馘首せず、タイムカードなし、定年なし」は社員を信頼するからこそで、この信頼をなくしたら日本は滅びる。そしてこれを世界に広めていくことこそ日本の役割、とあり、大いに考えさせられた。

一方、現実の日本においては、企業は労働基準法に基づき就業規則を作りかつ順守しなければならない。法にはさまざまな規制が盛り込まれており信頼よりもまずは規則が大前提だ。さすれば「海賊とよばれた男」からみれば労基法はまさに亡国の規則なのかもしれない。

一般に労働者を守る法律として労働基準法には残業規制や勤務時間の制限などがうたわれている。だがこの法律に詳しい方に聞くと労基法は経営者を制御するための法律で、決して労働者のための法律ではないらしい。

従業員を大切にという経営者は多いが、「海賊とよばれた男」まで徹底できるだろうか。従業員から絶大な信頼を得られる経営者は理想ではあるが、足元にも及ばないわが身を見てため息が出るばかりであった。（昭和学園高校理事長・日田市）